

[第 1 号報告]

1-1. 2016 年度事業計画書

1. 概況：重点活動
2. 会員の異動予想
3. 会議等に関する事項
4. 実施事業 1：調査研究活動（定款第 4 条 1 項 1 号および 2 号）
5. 実施事業 2：人材育成（定款第 4 条 1 項 4 号）
6. 実施事業 3：学術講習会の開催（定款第 4 条 1 項 1 号および 2 号）
7. 実施事業 4：会誌の刊行（定款第 4 条 1 項 1 号および 2 号）
8. 実施事業 5：論文誌・学術図書等の刊行（定款第 4 条 1 項 1 号および 2 号）
9. 実施事業 6：標準化活動（定款第 4 条 1 項 3 号）
10. 実施事業 7：国際活動（定款第 4 条 1 項 5 号および 2 号）
11. その他：関連学協会との連絡および協力（定款 4 条 1 項 6 号）
12. 法人運営

（参考）情報処理学会 中長期計画

2016 年度 事業計画書

1. 概況および重点活動

情報処理技術の急激な普及に伴い、誰もがインターネットを通じて世界中の情報に瞬時に接することができるようになる一方、学生の情報離れが危惧され、会員数や収入の継続的減少に悩んでいる学協会が多い。情報処理分野における技術イノベーションをリードする立場として、本学会の果たすべき役割は大きく、これまで抜本的改革を進めてきた。

学会価値の向上と会員向けサービスの向上を図ることを目指し、若い世代の会員を増やすため昨年度試行運用したジュニア会員制度を本格的に導入する。さらに企業に所属する会員数の増加にも取り組む必要がある。学生から社会人を含めた若い世代が関心を持つサービス・コンテンツの提供など、さらなる取り組みを進める。端緒についた実務家や IT プロフェッショナルに対する活動をさらに拡充し、情報処理分野の学術研究の発展を支援する会員向け活動と併せ、魅力のある学会を目指して中長期的視野で学会のさらなる活性化を実現していく。

本年度はこれまで推進してきた学会の改革を継続し、学会情報システムの拡充、新世代企画委員会の活用による新たな活動の推進、中長期戦略の維持発展、小中高生にまで範囲を広げた会員制度の拡充、教育・調査研究等の諸活動の推進と社会への提言・情報発信、グローバル化、高度 IT 人材の資格制度の強化、会員サービスの拡充において、下記を中心とする施策を実施する。さらに学会における女性の活躍について必要な議論の場として「Info-WorkPlace 委員会」を活用し、女性会員のネットワーク強化、女性が参加しやすいイベント企画など検討を進めていく。

また、2016 年 4 月に起こった熊本地震により被災された方々、そのご家族の方々に心よりお見舞い申し上げますと共に一日も早い復興を願い、会員皆様への会長メッセージの発信、熊本県・大分県に在住の会員様への会費減免等、本会としてもそのための支援をしていきたいと考えている。

1.1 学会運営体制の充実および財政基盤の強化

急激に変化する環境の中で、学会を安定的に運営しつつ、これを発展させるためには、学会としてのトラディショナルな活動は今までどおり大切にしつつ、新しいアイデアを積極的に取り入れて、学会を柔軟に改革できる運営体制が必要である。このため、下記の施策を実施する。

- ① 情報基盤の安定と健全な運用のために学会システムの拡充を図り会員サービスの向上を実現する。
- ② 昨年度策定したロードマップにのっとり、学会運営必要不可欠な情報インフラの整備に着手する。併せてセキュリティ対策の強化や研究会、支部のシステムの統合化も実施する。
- ③ グローバル化を進め教育・調査研究・実施事業等の学会コア活動の充実化と財務の良好なバランスを達成する。
- ④ 新世代企画委員会活動を推進し、そこから生まれた新たなチャネルの活用とともに既存の枠組みを活用し学会の成果を社会に還元する開かれた活動を推進する。
- ⑤ 長期戦略理事を中心に中長期戦略を維持発展させ、新しい会員サービス、学会のビジネスモデルや会誌の出版形態などの諸課題にアプローチする。
- ⑥ 第三者機関であるアドバイザリーボードからの提言を適宜諸事業へ反映する。
- ⑦ 前年度より検討に着手している27年間据え置かれた年会費について改訂の方向で検討をすすめる。
- ⑧ 財務状況の見える化を図るとともにジュニア会員制度を定着・活用し会員数の増加を図り健全な法人運営を行う。

1.2 学生・若手研究者育成のための活動および体制強化

- ① 新世代理事を中心とする横串の組織「新世代企画委員会」活動を推進し、新世代（学生・若手研究者・若手技術者）の発想を学会運営に取り込む。
- ② 小中高校生、高専生、大学学部1～3年生を対象とする会費無料の「ジュニア会員制度」を活用し、学生・生徒の育成を支援するとともに、学部4年生以降における有料会員への移行・学会活動の継続を促進する。若いIT人材を育成し日本の将来の成長に資する。
- ③ 研究会や支部などの協力も得て、学生や若手研究者のためのイベントを企画開催する。

1.3 調査研究活動ならびに提言活動の推進

- ① 学会のコアの活動として、研究会による諸活動を推進する。
 - (a) 研究会活動を通じた学生会員獲得
 - (b) 研究コミュニティの持続的発展を推進するための体制構築
 - (c) 研究会資料におけるマルチメディアコンテンツ取扱いに向けた検討の継続
- ② 調査研究運営委員会、政策提言委員会、若手研究者の会が連携し、
 - (a) 長期的な研究のグランドデザインやロードマップに関する議論の継続
 - (b) 国の政策および方針に関する各研究分野の積極的な提言活動の推進などを通じて、国および関連機関から「頼られ&相談される学会」を目指す。
- ③ 積立資金によるプロジェクトを募集し、個々の研究会活動を超えて、領域または調査研究全体による国際会議支援、女性研究者支援の活動を活性化する。また、研究会毎の財務の透明化を図り、適切な管理費負担を行う。
- ④ 現在の調査研究活動における研究会やシンポジウムの機会を活用し、異なる領域を統合する新たな研究領域開拓のための取り組み、および、それらを社会へ発信する活動を推進する。

1.4 グローバル化

- ① 英文論文誌 Journal of Information Processing（以下、JIP）のインパクトファクタ取得、論文の Citation 増などインパクトファクタ取得のための要件整理と諸対応を明確化し再申請を目指す。
トランザクション CVA についてはインパクトファクタの取得を申請中。
- ② 査読プロセスをグローバルスタンダードに合致させつつ国際会議連携などの自由度を持つものにすることの必要性和、それを支える査読管理システムの重要性を踏まえ、昨年移行した商用査読管理システム ScholarOne Manuscripts の定着と安定的運用を目指す。
- ③ 研究会活動を中心に、国際会議を積極的に主催するとともに、海外学協会との連携を推進する。
- ④ IEEE や ACM のようなグローバルトップの国際学会を参考にしつつ、これらとの連携も含めた学会のグローバル運営戦略を検討し、これを実施する。
- ⑤ 日本に留学生を多く輩出している中国や他のアジア地域などの国々との連携の機会を検討し、これを実施する。
- ⑥ CCF, KIISE との連携を強化し、CJK 連携の活動を検討する。

1.5 実務家・ITプロフェッショナル向け活動の強化

- ① 認定情報技術者（Certified IT Professional：略称 CIP）制度について、個人認証制度の本格運用を進めると共に、企業認定の制度についても本格運用を進める。また、IFIP IP3 の認定に向けて申請準備を進める。
- ② ソフトウェアジャパン、デジタルプラクティス、連続セミナー・短期集中セミナー、IT フォーラムなどにより、実務家・ITプロフェッショナルの育成に貢献するとともに、会員増、収入増を図る。
- ③ 情報処理推進機構（IPA）、情報サービス産業協会（JISA）、日本情報システム・ユーザー協会（JUAS）、

電子情報技術産業協会（JEITA）、科学技術振興機構（JST）、先端 IT 活用推進コンソーシアム（AITC）などの実務家・IT プロフェッショナルを対象とする団体や企業との連携をさらに深め、共同イベントの開催などを推進して、会員増に貢献する。

1.6 教育活動の充実

初等中等教育、専門学校そして大学などにおける情報教育、および企業の技術者を対象とした教育プログラムの推進に向けて、以下の施策を実施する。

- ① 情報教育カリキュラム J17（試作学習指導要領を含む）の策定
- ② アクレディテーション（教育機関における技術者教育プログラムの認定。JABEE からの委託）
- ③ 高校教科「情報」の教員免許更新講習会の開催
- ④ 大学入試における「情報」科目提言、大学情報入試全国模擬試験実施
- ⑤ 教育シンポジウム・コンテストの運営と後援

1.7 会員サービスおよび広報の充実

会員サービスの向上および広報宣伝の充実のための諸施策を企画し、会員の目線で、魅力ある学会作りを目指し、必要に応じて会員制度の見直しも検討する。具体的には下記の項目を実施する。

- ① オンライン刊行物の新しいビジネスモデルの推進、マルチメディアコンテンツ配信などの新しいサービス提供形態を推進する。
- ② 2014年度に提携したドワンゴ社のニコニコ動画、ならびに2015年度より論文と会誌記事の販売を開始したニコニコ静画等を活用し、学術コンテンツ（動画や論文など）の新たな流通プラットフォーム構築を推進する。
- ③ 会員のアクティビティの電子的な記録を収集するため、イベント・シンポジウム等申込サイトの試行を継続する。
- ④ 上記①を実現するために、最新CMS（Contents Management System）を採用した研究会・支部システム用共通基盤の試行に着手する。

1.8 学会システムの拡充

2015 年度に策定した開発ロードマップに沿って、各種の業務フローの簡略化を含めた学会情報システムの刷新を進める。これによって、本部事務局・支部・研究会の業務フローの電子化を段階的に実現し、業務効率の改善と会員サービスの向上を実現する。また、個人情報の散在によるセキュリティリスクを低減させる。

2. 会員数について

下記の取り組みを実施し、会員数の増加を目指す。

- ・将来の正会員の母体となる学生会員数を増やすため、ジュニア会員制度を中心に支部や研究会と連携して取り組む。支部の協力を得て学生のコミュニティを作り、自発的参加を促す。
- ・各活動において学会の価値向上に取り組み、新規会員の獲得に努める。

会員種別	会員数		増減数 ①－②	備考：2016年度の異動内訳				
	① 2016 年度末	② 2015 年度末		入会		退会		資格 喪失
名誉会員	39	37	2	2	正会員から異動			
正会員	15,462	15,699	-237	500 760	学生会員から異動	1,050 2	名誉会員に異	445
学生会員	2,464	2,695	-231	1,500 57	ジュニアから異動	1,000 760	正会員に異動	28
ジュニア会員	961	668	293	800		450 57	学生会員に異	
個人会員 計	18,926	19,099	-173	3,619		3,319		473
賛助会員 (口数)	220 (527)	220 (527)	0 (0)	15 (15)		15 (15)		

*2016年度期末正会員数には終身会員 519 名を含む。

3. 会議等に関する事項

下記の会議を計画する。TV 会議システム等を活用し効率的な運用に努める。

3.1 2016 年度通常総会

2016 年 6 月 3 日（金）に、学士会館（東京都千代田区）で開催する。同時に賛助会員向けに講演会と交流会を計画する。また、歴代会長懇談会も実施する。

3.2 理事会

年度内に 6 回以上開催し、学会活動に関する諸事項を審議する。

3.3 各種委員会

必要に応じて開催し、所轄活動に関する諸事項を審議する。

4. 実施事業 1：調査研究活動（定款第 4 条 1 項 1 号および 2 号）

学会のコアの活動として重点的に取り組み、関連諸活動とも連携して活動の拡大・発展を目指す。
具体的には下記の取り組みを推進する。

- ① 長期的な研究のグランドデザインや 2013 年度に定めた「情報学分野の科学・夢ロードマップ 2014」に添って、情報処理分野における学術大型研究計画の企画・立案の検討を継続する。
- ② 国の政策や方針に関する各研究分野の提言活動を推進する。

- ③ 日本の情報処理学会として必要なグローバル化のための議論を継続する。国際会議を積極的に主催、共催し財務の健全化に努める。CCF, KIISE との連携を軸に CJK での活動を検討する。
- ④ 研究会活動の国際化, 特に, 海外学会との共同シンポジウム, 合同ワークショップを積極的に開催し, 国際的かつ継続的な“研究コミュニティの形成”を行い, 新しい研究, 技術の国際的発信を継続的に行う研究活動環境を構築する。
- ⑤ 研究コミュニティの持続的発展を支える体制構築を促す環境整備を推進する。
- ⑥ 学生・若手に向けた積極的な取り組みにより, 将来を担う学生・若手研究者の育成を図る。
- ⑦ 調査研究積立資産を活用し, 個々の研究会活動を超えて, 領域単位のプロジェクト, 若手表彰, 国際化の推進など調査研究全体の活動も積極的に展開する。研究会の収支の透明化を図り, 適切な管理費の負担を行う。
- ⑧ 若手の意見を吸上げ, 研究会の動画配信など新しい取組に継続してチャレンジする。
その他, 必要に応じて, 研究会組織の見直し, 研究発表会への新たな参加方法の検討などを行う。

4.1 研究発表会 [所掌：調査研究運営委員会]

昨年度まで研究グループとして活動していたアクセシビリティ (AAC) 研究グループが新たに研究会となって全40研究会, 3研究グループ (詳細は p. 88 「付表1」 参照) により, 160回程度 (前年度161回) の研究発表会を開催する。

4.2 シンポジウム・ワークショップ等 [所掌：調査研究運営委員会]

シンポジウム・ワークショップ等については 22 回の開催を計画する (詳細は p. 89 「付表 2」 参照)。

4.3 表彰 [所掌：各選奨等委員会]

優れた研究発表および業績等に対して, 山下記念研究賞, 業績賞, 若手奨励賞などを贈呈する。また, 2016年6月総会での表彰をもって終了した長尾真記念特別賞の後継賞として企業スポンサーによる新たな賞の設置を検討する。

5. 実施事業2：人材育成 (定款第4条1項4号)

初等中等教育を含む情報教育, および企業の技術者を対象とした教育プログラムの推進に向けて, 以下の施策を実施する。

5.1 情報教育カリキュラムの策定 [所掌：情報処理教育委員会]

(1) 情報カリキュラム標準 (J07) のフォローアップ

現行のカリキュラム標準 J07 の普及・改訂, 教科書など教材の整備・提供・普及などを引き続き行い, その中で浮かび上がった課題やその対策を次期カリキュラム標準の検討に反映させる。

(2) 次期カリキュラム標準 J17 の策定にむけた作業

次期カリキュラム標準 J17 の策定を本格的に行う。

(3) 初等中等教育での情報教育支援

国の情報教育の方向及び内容に関して, 他学協会とも連携して意見書や試作学習指導要領の作成公表などの提言を行う。また, 「会員の力を社会につなげる」研究グループ (SSR) と連携して, 初等中等教育現場の情報分野の教員の養成支援, 教材開発や出張授業などを通じて, 教育現場支援をさらに推進する。

5.2 アクレディテーション（技術者教育プログラムの認定） [所掌：情報処理教育委員会]

アクレディテーションによる大学・大学院専門教育の質的向上の推進のため、日本技術者教育認定機構（JABEE）委託の認定評価を継続する。関連して、認定校・受審予定校のコミュニティの育成、専門職大学院認証評価などの活動支援を行う。また、JABEEに協力して情報専門系課程教育の質保証に努め、ソウル協定による国際水準を目指して教育改善を推進する。

5.3 認定情報技術者制度 [所掌：資格制度運営委員会，個人認証審査委員会，企業認証審査委員会]

高度 IT 人材資格「認定情報技術者（Certified IT Professional：略称 CITP）」制度の個人認証については、2014 年度に開始した本格運用を引き続き進め、累計認定登録者数 3,000 人規模を目指す。資格更新に必要な CPD についても検討を進める。企業認定については、2015 年度に開始した本格運用を引き続き進め、新たに 5 社の企業認定を目指す。また、技術士会等関連組織との連携強化を図る。

5.4 教員免許更新講習の開催 [所掌：情報処理教育委員会]

2014 年度より実施している高校の教科「情報」に関する教員免許更新講習を引き続き実施する。東京以外の場所でも開催する。本会が講習を実施することで、「情報」に関する更新講習不足を補うとともに、高校の情報科教員の養成を支援する。

5.5 その他 [所掌：情報処理教育委員会]

(1) 教育シンポジウムならびにコンテストの運営・後援等

教育に関するシンポジウムならびにコンテストを企画運営する。高校教科「情報」に関するシンポジウムは東京と関西で開催する。また、若い世代への本会のプレゼンスの向上をめざして、大学生、高校生等を対象とするコンテストの後援（表彰活動）等を推進する。

(2) 大学入試科目に「情報」を導入するための活動

各大学における入試科目に「情報」の採用を推進する情報入試委員会および情報入試研究会、「情報」を入試科目として採用している大学、「情報」の教員等と緊密に連携して、大学情報入試の模擬試験を実施する。

(3) 学会誌への教育関連記事の掲載

会員の情報教育への関心を高め、初中等教育現場関係者の学会活動への参加を促すために、学会誌に「べた語義」などの教育関連連載記事を企画・編集する。

(4) 表彰、その他

- ① 優れた情報教育の実践等を顕彰するため、優秀教育賞・教材賞を贈呈する。
- ② 教材，講義素材，講義資料などのデジタルアーカイブ実現に向けて調査・検討を行う。
- ③ 教育関連の事業活動の成果を学会収益に結びつける仕組みや寄付の募集を検討する。

6. 実施事業 3：学術講習会の開催（定款第 4 条 1 項 1 号および 2 号）

学術講習会は、学会の重要な収入源であるとともに、学生も含めた若手研究者の活動の場あるいは企業の IT 技術者の情報交換の場でもある。2016 年度は下記の方針で取り組む。

- ・全国大会と情報科学技術フォーラム（FIT）は、前年度と同様に取り組む。
- ・企業の IT 技術者向けの連続セミナー，短期集中セミナーなどは魅力的なテーマを選定し，活動を活性化する。
- ・イベント周知のため，学会誌へ定期的に記事を掲載することを検討する。

6.1 全国大会／FIT

(1) 第79回全国大会 [所掌：全国大会組織委員会]

会期：2017年3月16日(木)～18日(土)，会場：名古屋大学

参加者見込：約3,200名(前年度3,220名)

若手研究者によるトークイベント「IPSJ-ONE」も継続実施する。

(2) 第15回情報科学技術フォーラム(FIT2016) [所掌：FIT推進委員会]

会期：2016年9月7日(水)～9日(金)，会場：富山大学 五福キャンパス

参加者見込：約1,500名(前年度1,206名)

FITの運営や論文の査読について見直しを検討する。

(3) 表彰 [所掌：全国大会組織委員会]

優れた発表を顕彰するため、全国大会優秀賞・奨励賞などを贈呈する。

6.2 セミナー／その他イベント

(1) 連続セミナー2016 [所掌：セミナー推進委員会]

産業界向けのイベントとして以下を企画，開催する。参加者数見込：延900名(遠隔含む)。

また，前年度に引続き，遠隔会場(関西)中継を実施する。ニコニコ動画による有料アーカイブ化も試みる。

全体テーマ 「イノベーション最前線：変わりゆく社会と生活へのインパクトの源流を究める」

- (1) 「実世界に埋め込まれる人工知能」
- (2) 「ビッグデータ利活用を支えるクラウド基盤技術」
- (3) 「スマートなヘルスケアとライフケア」
- (4) 「広がりを見せるIoTの現状と今後の展望」
- (5) 「メディアアート」
- (6) 「フィンテック～ブロックチェーンの理解と応用～」

(2) 短期集中セミナー [所掌：セミナー推進委員会]

学生・若手開発者向けの1日開催のセミナーを開催する。実務者向けのイベントをタイムリーに開催する。関連団体と共催しセミナーを開催する。

(3) ソフトウェアジャパン2017 [所掌：ITフォーラム推進委員会]

会期：2017年2月3日(金)，会場：一橋大学一橋講堂会議室，参加者数見込：500名

- ① プログラムの充実，スポンサーの拡大などにより，運営の改善を図る。
- ② ITフォーラム，デジタルプラクティスとの連携によりシナジー強化を図る。
- ③ ソフトウェアジャパンアワードの選定を行い表彰する。

(4) プログラミング・シンポジウム [所掌：事業運営委員会]

以下3つのシンポジウムを開催する。

- | | | |
|----------------------|---------------|------|
| ① 夏のプログラミング・シンポジウム | 会期：2016年9月頃予定 | 合宿形式 |
| ② 情報科学若手の会 | 会期：2016年9月頃予定 | 合宿形式 |
| ③ 第58回プログラミング・シンポジウム | 会期：2017年1月頃予定 | 合宿形式 |

6.3 ITフォーラム [所掌：ITフォーラム推進委員会]

- ① 次の6つのフォーラムで活動する。

サービスサイエンス／ユニバーサルデザイン協創／CITP

コンタクトセンター／ビッグデータ活用実務／勉強会

- ② 年1回の成果報告と評価を実施し、それに基づくフォーラム組み替えの仕組みを確立し、新たなフォーラムの立ち上げを検討する。
- ③ 戦略的な広報活動とアウト・リーチする仕組みの確立のため、情報処理推進機構（IPA）、情報サービス産業協会（JISA）、日本情報システム・ユーザー協会（JUAS）、電子情報技術産業協会（JEITA）など、ターゲットとする関連コミュニティとの連携を強化する。また、ITプロフェッショナルが学会に何を期待するのかを、フォーカスグループなどにより調査する。
- ④ デジタルプラクティス編集委員会、ITプロフェッショナル委員会との連携を強化して、ITプロフェッショナルに魅力のあるコミュニティに向けて検討する。

6.4 AI プログラミングコンテスト [所掌：プログラミングコンテスト委員会]

本プログラミングコンテストは、インターネット産業の急速な発展によるエンジニアの質と量の確保がますます重要となる中、若い世代から将来第一線の研究者や開発者になりうる、また世界市場を舞台に活躍できる人材を育てることを目的に、2012年度より「IPSJ International AI Programming Contest "Samurai Coding"」を開催している。今年度で第5回目となる。

- ① より広い層の参加者を求めるため、次のような施策を検討・実施する。
 - ・2015年度に引き続き多数の企業や国内学会からのスポンサーおよび協賛を得て、国内で広く認知を得るとともに参加を呼びかける。
 - ・2015年度に引き続きIEEE-CS、CCF、KIISE等の海外の学会や組織の協賛を得て、国際的に広く認知を得るとともに参加を呼びかける。
 - ・決勝戦は、3月の第79回全国大会と同会場での開催を予定する。
 - ・名称は、「Samurai Coding 2016-17」とする。
- ② 競技システムの信頼性・利便性の向上に努める。また、観客にとって判り易い、楽しめるゲームを開発する。

6.5 各支部による支部連合大会、講習会等の開催 [所掌：各支部]

各支部において支部連合大会、講習会等を開催する。

7. 実施事業4：会誌の刊行（定款第4条1項1号および2号）

全会員に冊子で配布される唯一の媒体として「読まれる会誌」、「魅力ある会誌」を目指す。会員からのフィードバックを参考に、特集と連載中心の編集を行う。

7.1 会誌「情報処理」 [所掌：会誌編集委員会]

(1) コンテンツ

「読まれる学会誌」を目指して、会員サービスという観点からも、会員増という観点からも学会誌をさらに面白いものにする。また、頁数やカラー頁に関しては昨年度並みに運用する。

- ① 著名人による巻頭コラムや時事性・話題性の高い「特別解説」の継続、連載記事のバラエティを増やすなど、幅広い読者に読まれる会誌を目指す（例：海外情報、人物紹介、自己啓発、教育関係など）。
- ② 毎月の季節を考慮した定番記事を工夫する。
- ③ 会員アンケートによる意見をフィードバックする。
- ④ 記事の補足情報をWebに掲載するなどオンライン版との連携強化、また過去の記事・論文を利活用するオンライン版別冊の企画などについて検討する。

- ⑤ 学生会員向けのサービス強化の一環として、各支部の学生会員(または若手会員)に記事を依頼する。
- ⑥ デジタルプラクティス、論文誌との連携を強化する。
- ⑦ 小中高生(ジュニア会員)向け記事について検討する。
- ⑧ 女性編集委員増を委員会活性化、記事の魅力の増加、新たな企画提案につなげる。
- ⑨ 冊子体では伝えきれないような、体験型の情報提供・啓蒙に資するため、会誌に付録をつける。
- ⑩ 記事と連動したマルチメディアデータの情報学広場への掲載についても検討する。
- ⑪ 支部活動の紹介・報告記事を掲載し、支部への積極的な参加を呼びかける。

(2) その他、広報・宣伝の充実および編集体制の改善

- ① 会誌への広告掲載、IPSJ メールニュースへの広告掲載、Web サイトへのバナー広告掲載、カタログ同封サービスへの広告掲載の魅力を高め、総務財務委員会等と協力して広告活動に一層努力する。
- ② 別刷の購入を視野に入れた特集等の企画を積極的に行う。
- ③ 特集記事に関連した広告を掲載できるように広報活動を強化する。
- ④ 一般読者が読み物として気軽に読めるように、各記事のページ数を減らす。フルカラーの必要がない記事についてはモノクロとするが、モノクロでも伝わる分かりやすい図表、記事を掲載する。
- ⑤ App Store, Fujisan において会誌電子版、特集別刷電子版および DP の販売・購読を促進する。

8. 実施事業 5：論文誌・学術図書等の刊行（定款第 4 条 1 項 1 号および 2 号）

論文誌の論文投稿数、採録数の増加と論文の質の確保を継続する。英文論文誌 Journal of Information Processing (以下、JIP) は基幹英文論文誌として育成・強化し、CVA 等のトランザクションも併せてインパクトファクタの取得を目指す。

8.1 論文誌（ジャーナル/JIP/トランザクション/デジタルプラクティス）

(1) 「情報処理学会論文誌（ジャーナル）」（月刊） [所掌：ジャーナル編集委員会]

- 1) 論文投稿数の増加に向けた取り組み、および採録数の増加に向けた取り組み
 - ① 年間の論文採録数は、230 編以上を目標とする。
 - ② 論文執筆のための心構えの広報の強化による投稿論文の質の向上を図るとともに、「べからず集」の徹底による査読の質の向上とそれに伴う採録率の安定・向上を目指す。
 - ③ 研究会推薦論文制度や招待論文制度等を積極活用し、良質の論文の投稿を喚起する。
 - ④ 論文誌編集委員会企画の特集号を継続する。
- 2) 論文査読管理システムの運用と見直し
 - ① 編集体制を見直し、可能な部分について簡素化・効率化する方向で改善を進める。
 - ② 2015 年 9 月までに独自システム PRMS で受け付けた論文の査読が完了したのちシステムを停止し、商用システム ScholarOne Manuscripts への移行を完了させ、新査読システム ScholarOne Manuscripts の定着と安定的運用を目指す。
 - ③ エクスプレス査読の実現可能性について調査する。
- 3) 電子化を有効活用した改善
 - ① 論文誌関連の統計情報（例：ダウンロード数）の有効利用を検討する。

(2) 「Journal of Information Processing (JIP)」 [所掌：JIP 編集委員会]

- 1) JIP の海外投稿促進と国際化
 - Web of Science 収録基準を満たし、インパクトファクタ (IF) の取得に向けた施策を実施する。
 - ① 年間論文採録数の目標を前年度から 10%増の 100 編とし、2017 年 1 月からの月刊化を目指す。

- ② 研究会推薦論文の英語化を促し JIP に掲載するというパスを確立させ、良質の論文を呼び込む。
- ③ 編集委員に海外の研究者を迎え入れて国際化された編集委員会を本格化させる。
- ④ 国際会議の優秀論文、著名な研究者の招待論文、国内の大規模プロジェクト等の成果論文を積極的に採録する。また、国際会議・海外の学会との連携（特に韓国、中国の各学会との共催の国際会議）等、JIP 独自の特集号を企画する。
- ⑤ インパクトファクタ取得に向けた JIP 掲載料の割引キャンペーンは一定の効果を上げており、収支構造を含めて再見直しを行う。

(3) トランザクション (10 誌) [所掌：各トランザクション編集委員会]

発行の安定性と永続性、ジャーナルとの協調、JIP との連携、購読数の拡大を目標に、トランザクション 10 誌合計で採択論文数 170 編以上を目指す。特に研究会との連携による投稿数増大を目指す。ジャーナルと同様に英文論文の投稿促進、および英文トランザクションのインパクトファクタ取得の検討を進める。また、トランザクションにおける論文査読管理の電子化の推進を行う。

情報関係学会英文論文合同アーカイブズ (IMT: Information and Media Technologies) の編集運営会議幹事学会として編集および定期的刊行を実施する。

(4) 実務活動の論文誌「情報処理学会デジタルプラクティス」[所掌：デジタルプラクティス編集委員会]

- ① 実務活動の論文誌「デジタルプラクティス」および「DP レポート」のプレゼンス向上と読者層・著者層の開拓をする。
- ② 社会的有用性を重視した査読基準の確立・共有と、実践に関する記述例の蓄積に努める。
- ③ IT 産業に従事し、論文執筆に馴染みの薄い方々に対して、「デジタルプラクティス」や「DP レポート」での論文発表のメリット（自身の業績や研究成果を論文の形で半永続的に残すこと等）を訴求し、投稿を促進する。
- ④ 査読委員・編集担当の確保、モニター制度の充実、収益の改善など、安定した刊行のための体制整備に努める。
- ⑤ ソフトウェアジャパンや連続セミナー・短期セミナー等のイベント、他団体等との連携を推進する。
- ⑥ 会誌編集委員会、資格制度運営委員会との連携を強化する。
- ⑦ 研究会との連携を検討する（研究会からの推薦論文制度、研究会からの査読委員の推薦など）。

(5) その他

各誌の優れた論文を顕彰するため、論文賞、デジタルプラクティス論文賞等を贈呈する。

8.2 専門誌：教科書シリーズ [所掌：出版委員会]

新しい体制で既企画のメンテナンスと新規企画検討を行う。

8.3 歴史資料の保存・公開 [所掌：歴史特別委員会、コンピュータ博物館小委員会]

- ① 現存している歴史的に価値のある機器の保存活動、「情報処理技術遺産」「分散コンピュータ博物館」の認定
- ② 「コンピュータ博物館」の充実
- ③ オーラルヒストリーの編集・公開
- ④ 全国大会特別セッション「～コンピュータパイオニアが語る～私の詩と真実」の企画

8.4 電子図書館事業の推進 [所掌：デジタルコンテンツ事業検討委員会]

- ① 2015年4月より企業向けサイトライセンスサービスを開始し、多くのユーザへのビジビリティ向上を図る。2014年度(初年度)は36件(大学向けのみ)、2015年度50件(大学+企業向け)、2016年度は、75件を目指す。

- ② サイトライセンス機能のユーザビリティ向上等、会員からの要望に応え、情報学広場のサービスの充実を図る。
- ③ 研究会、論文誌編集委員会と連携し、マルチメディアコンテンツを含む論文の採録に取り組む。

9. 実施事業6：標準化活動（定款第4条1項3号）

ISO/IEC JTC 1 対応を主に、情報技術に関する国際規格の審議およびこれに関する調査研究、国内規格の審議などによる標準化活動を行う。より戦略的かつ健全な運営を行うために、標準化活動の重み付けのさらなる検討と、規格賛助員および委員会メンバーのためのサービス向上に努める。

9.1 情報規格調査活動 [所掌：情報規格調査会]

(1) ISO/IEC JTC1 対応組織としての戦略的な貢献

ISO/IEC JTC1 直属の17のSC(全20SC中)および各WG, SG(Study Group), SWG(Special Working Group)の対応を行う。さらに国際提案準備と、JIS 原案作成を適宜行う。

- ① メディア符号化(SC29), デジタル記憶媒体(SC23), 文字コード(SC2)などの重点領域の議長, 幹事国役職引き受けを継続する。
- ② 戦略的な貢献として, 2020年までにJTC 1総会を国内招致すべく検討を開始する。
- ③ 2015年11月に設立が決まったJTC 1/WG 11(Smart Cities)に対して, 技術委員会の傘下に小委員会を設置し, 同様にスマートシティに関する活動を開始しているISO, IEC 及びITU-Tの各国内委員会と連携しながら対応を行う。また, SWG 2(Directives), SWG 3(Planning) 及び SWG 6(Management)を改組して設置されるJTC 1 Advisory Groupでの活動を通じてJTC 1の運営に貢献すると共に, 新規テーマの発掘への貢献と日本での新規領域における国際提案に結び付ける。
- ④ 議長, 幹事国, コンビーナ, プロジェクトエディタ等を引き受けているものも含め, 活動の優先度を見極め人的資源の集中化・重点化を図る。
- ⑤ ビジネス機械・情報システム産業協会(JBMIA), 電子情報技術産業協会(JEITA), 情報通信技術委員会(TTC)などの協力を得ながら積極的に対応を図る。

(2) 健全な情報規格調査会の運営の維持

- ① 昨年度に引き続き規格賛助会費と権利の関係を健全化すべく, 各委員会活動への参加形態の整理と見直しを行う。
- ② 技術委員会の役割を再確認及び委員の役割と構成の見直しについて検討を進め, 規定等の変更が必要となった際には, 2016年の規格総会・理事会での承認を得て, 2017年度の施行を目指す。

(3) 標準化活動の支援と広報

- ① 昨年に引き続き, 新規事業としての標準化セミナー開催を実施し, 国際標準化におけるホットトピックスや各委員会における活動内容を紹介することで, 国際標準化に対する意識を高め, 参加者を募る。
- ② 広報活動を強化し, ITSCJの存在と活動に関する認知度を高める。
- ③ 昨年に引き続き, システムのセキュリティ強化と委員会活動の効率化推進。

10. 実施事業7：国際活動（定款第4条1項5号および2号）

研究会活動を中心に、国際会議を積極的に主催、共催し活動の活性化を図ると共に、海外学協会との連携を推進する。

(1) International Federation for Information Processing (IFIP) 活動への参加 [所掌：IFIP 委員会]

- ① IFIP 日本代表、各 TC 日本代表の総会 General Assembly (GA) ・理事会 Council への参加
- ② 各 TC 日本代表の TC-meeting への参加と IFIP 活動周知の活性化
- ③ IFIP IP3の活動に参加し、CITP 資格の国際的相互認証の仕組みを構築

(2) IEEE ならびに IEEE-Computer Society との連携・協力

- ① The 40th Annual International Computer Software & Applications Conference (COMPSAC2016) への技術協力
日程：2016年6月10日（金）～ 14日（火），場所：Atlanta, Georgia, USA
- ② 全国大会での IEEE-CS 会長招待講演を実施
- ③ IEEE Computer Society との姉妹学会 MOU を継続するとともに、会員向けの連携サービスを検討

(3) 海外学協会との連携・協力

- ① Korean Institute of Information Scientists and Engineers (KIISE) との連携・協力および双方の全国大会での会長の交互招聘・招待講演を実施する（2016年度は KIISE 会長を当会大会へ招聘の予定）。
- ② China Computer Federation (CCF) との連携・協力を推進する。
- ③ 下記の海外学協会との協力関係を継続する。
 - ・ Association for Computing Machinery (ACM)
 - ・ Computer Society of India (CSI)
 - ・ 他の学協会とも協力関連構築を模索
- ④ アジアの関連学会である中国CCF(China Computer Federation)，韓国KIISE (The Korean Institute of Information Scientists and Engineers)，インドCSI (Computer Society of India) との中長期的な交流に向けて意見交換を進める。
- ⑤ The International Association for Pattern Recognition (IAPR) 活動への参加。
- ⑥ 日本に留学生を多く輩出しているアジア地域などの国々の情報系学会との共同シンポジウムなどによる連携の機会を検討し、新たな取り組みを企画する。

(4) 国際会議

COMPSAC2016の他、下記6件の国際会議を開催する。

- ・ International Workshop on Security (IWSEC2016)
2016年 9月 7日～ 9日，富山大学 五福キャンパス（日本）
- ・ The Eighth International Conference on Collaboration Technologies (CollabTech2016)
2016年 9月14日～16日，金沢しいのき迎賓館（日本）
- ・ International Conference on Mobile Computing and Ubiquitous Networking(ICMU2016)
2016年10月 4日～ 6日，DFKI Kaiserslautern, Kaiserslautern（ドイツ）
- ・ Asia-Pacific Requirements Engineering Symposium (APRES 2016)
2016年11月10日～12日，南山大学フラッテンホール（日本）
- ・ International Conference on Conceptual Modeling (ER 2016)
2016年11月14日～17日，長良川国際会議場（日本）

1 1. その他：関連学協会等との連携および協力（定款4条1項6号）

目的を同じくする学協会との連携および協力を行う。情報処理推進機構（IPA）、情報サービス産業協会（JISA）、日本情報システム・ユーザー協会（JUAS）等とこれまでの協力関係をさらに強化する。

11.1 関連学協会・日本学術会議

(1) 日本工学会および電気・情報関連学会連絡協議会への参加

日本工学会および電気・情報関連学会連絡協議会に参加し、関連学協会との協力連携を図る。日本工学会主催の会長懇談会に参加する。

(2) 研究発表・学術講習会等の共催

電子情報通信学会との共催による「情報科学技術フォーラム（FIT）（前6項参照）」ほか、研究発表会および学術講習会において関連学協会等と適宜共催を行う。

(3) 日本学術会議など関連団体等への協力

日本学術会議に協力学術研究団体として協力するとともに、若手研究者の会を通じて、日本学術会議の若手アカデミー委員会に参加する。

11.2 会議の協賛後援等

関連学協会等からの要請に応じて適宜、会議の協賛後援等を行う。

1 2. 法人運営

会員の視点での会員サービスのあり方を検討し、必要に応じて会員制度および学会情報システムの見直しを実施する。

12.1 入会促進

(1) 新規会員の獲得と会員減の防止

- ① 各活動において学会の価値向上に取り組み、新規会員の獲得に努める。
- ② 理事を中心に新規会員獲得の地道な勧誘と企業への働きかけを継続するとともに、引続き、退会要因の分析による退会抑止に努める。
- ③ 会費の口座引落、クレジットカード決済等の推進により「滞納→資格喪失」を防止するよう継続して対応する。
- ④ 産業界に属する会員への学会価値向上に向けた検討を進める。

(2) 学生会員の獲得と育成

- ① ジュニア会員制度を通じて若年層に学会活動を広く周知し、学生会員の獲得を促進する（目標 2,000人程度）。
- ② 学生会員の1研究会無料登録を継続し、研究会活動への参画を通じて学生会員の育成に努める。
- ③ 学生会員の新規獲得と正会員への定着率の向上のため、学生から企業若手社員をターゲットとしたコ

コンテンツの拡充によって学会の魅力を向上させ、プロフィールシステムの活用にて所属異動における利便性を確保し退会抑止に努める。

12.2 政策提言活動の推進

政策提言委員会は、学会各種委員会と連携して、日本学術会議の関連活動、関連省庁との意見交換体制を継続し、国の政策および方針について学会としての意見を積極的に提言・情報発信することにより、国および関連機関から「頼られ&相談される学会」を目指して、学会の一層のビジビリティ向上に繋げる。

12.3 震災復興関連の取り組み

2014年9月に工学系6学会会長連携会議の主催で開催した「四国巨大災害危機管理フォーラム」（高知市で開催）の流れを受けてFIT2016第15回情報科学技術フォーラム（9月に富山大学で開催）で災害に関するセッションを企画開催する。

12.4 運営体制の充実・改善等

(1) 新世代発想の学会運営への取り組み

新世代理事を中心とする横串の組織「新世代企画委員会」の活動を推進し、新世代（学生・若手研究者・若手技術者）の発想を学会運営に取り込む。ニコニコ静画での学会コンテンツ販売を学会の新しいビジネスモデルに繋げる。若手研究者によるトークイベント「IPJSJ-ONE」は継続し発展させる。

昨年度設立した勉強会フォーラムの活動を拡大し利用する勉強会の拡大を図る。

また、若手研究者の会からの意見を学会運営に反映できるよう、引続き、企画政策委員会・政策提言委員会・調査研究運営委員会などと連携して対応する。

(2) 財務基盤の強化

- ① 正会員の減少傾向や今後の増税等の影響を考慮し、継続的な運営と財務基盤安定のため27年間据え置いている年会費の見直しを検討する。
- ② 入会手順と年会費月割請求の見直しを実施する。
- ③ 終身会員や仕事をリタイヤされた個人及び企業の皆様に幅広く寄付の御願いをし、学会活動の更なる活性化を図っていく。寄付は現金に加えて、情報技術に関わる有形無形の資産、ボランティアで提供いただける役務なども可能とする。

(3) 長期的ビジョンの継続体制の確立

長期戦略理事を中心に、学会運営における長期的ビジョンについて、その実現に向けた中長期計画の立案・実施・評価・見直しのPDCAを継続的に実施可能となる体制を整えていく。具体的には、理事会のみならず、各事業を担う委員会において、その活動の中長期計画の観点から見直したり、学会全体の中長期計画の見直し提言が議論できる体制の確立を目指す。

(4) 中長期計画を踏まえた運営改善

「魅力ある学会」に向け、学会活動に関する中長期計画を踏まえつつ、第三者機関であるアドバイザーボードの助言も得て、引続き学会価値の向上と運営の改善への取り組みを継続する。そのために、中長期計画の中で分野・担当毎の目標と指標（KPI）を明確化し、活動を客観的・定量的に評価する意識を高めることを目指す。

(5) 広報活動の推進・諸活動のデータ収集

- ① 学会Webの充実の他、Facebook、Twitter、情報処理学会公式ニコニコチャンネル、App Storeなどソーシャルメディアを活用した積極的な広報活動を推進する。
- ② 各種行事等の場での入会促進および学会紹介、IPJSJメールニュースの内容充実に継続して努める。
- ③ 諸活動データの収集・分析により、その評価・改善を継続する。

12.5 その他表彰等

功績賞，学会活動貢献賞，感謝状の贈呈のほか，フェロー認定，シニア会員認定，情報処理技術遺産・分散コンピュータ博物館の認定等を行う。学会の賞については積極的に企業のスポンサーを開拓する。

以上

【付表1：研究会・研究グループ】

【コンピュータサイエンス領域：研究会（10）（括弧内は英略称）】

データベースシステム（DBS），ソフトウェア工学（SE），システム・アーキテクチャ（ARC），システムソフトウェアとオペレーティング・システム（OS），システムとLSIの設計技術（SLDM），ハイパフォーマンスコンピューティング（HPC），プログラミング（PRO），アルゴリズム（AL），数理モデル化と問題解決（MPS），組込みシステム（EMB） 各研究会

【情報環境領域：研究会（17）（括弧内は英略称）】

マルチメディア通信と分散処理（DPS），ヒューマンコンピュータインタラクション（HCI），コンピュータグラフィックスとビジュアル情報学*（CG），情報システムと社会環境（IS），情報基礎とアクセス技術（IFAT），オーディオビジュアル複合情報処理（AVM），グループウェアとネットワークサービス（GN），ドキュメントコミュニケーション（DC），モバイルコンピューティングとパーベシブシステム（MBL），コンピュータセキュリティ（CSEC），高度交通システムとスマートコミュニティ（ITS），ユビキタスコンピューティング（UBI），インターネットと運用技術（IOT），セキュリティ心理学とトラスト（SPT），コンシューマ・デバイス&システム（CDS），デジタルコンテンツクリエーション（DCC），高齢社会デザイン*（ASD） 各研究会

【メディア知能情報領域：研究会（13），研究グループ（3）（括弧内は英略称）】

自然言語処理（NL），知能システム（ICS），コンピュータビジョンとイメージメディア（CVIM），コンピュータと教育（CE），人文科学とコンピュータ（CH），音楽情報科学（MUS），音声言語情報処理（SLP），電子化知的財産・社会基盤（EIP），ゲーム情報学（GI），エンタテインメントコンピューティング（EC），バイオ情報学（BIO），教育学習支援情報システム（CLE），アクセシビリティ*（AAC） 各研究会
ネットワーク生態学（NE），会員の力を社会につなげる（SSR），情報処理に関する法的問題（LIP） 各研究グループ

*名称変更 *新設

【付表2：シンポジウム・ワークショップ等】

シンポジウム等名（主催研究会）	開催日	場所
ハイパフォーマンスコンピューティングと計算科学シンポジウム (HPCS2016) (HPC)	2016. 6. 6(火)～7(水)	東北大学 片平さくらホール
マルチメディア, 分散, 協調とモバイル (DICOMO 2016) シンポジウム (DPS, GN, MBL, CSEC, ITS, UBI, IOT, SPT, CDS, DCC)	2016. 7. 6(水)～8(金)	鳥羽シーサイドホテル
情報教育シンポジウム (SSS2016) (CE, CLE)	2016. 8. 22(月)～24(水)	グリーンピア大沼
ソフトウェアエンジニアリングシンポジウム 2016 (SES2016) (SE)	2016. 8. 31(水)～9月2(金)	東洋大学
DA シンポジウム 2016 (SLDM)	2016. 9. 14(水)～16(金)	山代温泉 ゆのくに天祥
WebDB フォーラム 2016 (DBS)	2016. 9.	(首都圏)
コンピュータセキュリティシンポジウム 2016 (CSS2016) (CSEC, SPT)	2016. 10. 11(火)～13(木)	秋田キャッスルホテル
マルチメディア通信と分散処理ワークショップ (DPS)	2016. 10. 19(水)～21(金)	プラザホテル山麓荘
組込みシステムシンポジウム 2016 (ESS2016) (EMB)	2016. 10. 20(木)～22(土)	早稲田大学
ゲームプログラミングワークショップ (GPW2016) (GI)	2016. 11. 11(金)～13(日)	軽井沢学習研修室
エンタテインメントコンピューティング 2016 (EC)	2016. 11. 12(土)～14(月)	グランフロント/ 相愛大学
インターネットと運用技術シンポジウム (IOTS2016) (IOT)	2016. 11. 24(木)～25(金)	宮地茂記念館
グループウェアとネットワークサービスワークショップ 2016 (GN)	2016. 11. 25(金)～26(土)	(未定)
コンピュータシステム・シンポジウム (ComSys2016) (OS)	2016. 11. 29(火)～30(水)	(未定)
SOUPS2016 論文読破会 (SPT)	2016. 11.	(東京)
災害コミュニケーションシンポジウム (IS, GN, IOT, SPT, EIP)	2016. 12.	(未定)
人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん 2016) (CH)	2016. 12.	(未定)
高度交通システムシンポジウム 2017 (ITS)	2017. 1. 13(金)	日本科学未来館
ウィンターワークショップ 2017 (SE)	2017. 1.	(未定)
Annual Meeting on Advanced Computing System and Infrastructure (ACSI2017) (OS, HPC, PRO)	2017. 1.	(未定)
情報アクセスシンポジウム (IAS) 2017 (IFAT)	2017. 2.	(未定)
インタラクション 2017 (HCI, GN, UBI, DCC, EC)	2017. 3. 1(水)～3(金)	科学技術館

情報処理学会中長期計画 2016年度版

情報処理学会 中長期計画				2015年度				2016年度				2017年度							
項目	方向性	キーワード	指標(KPI)	1Q	2Q	3Q	4Q	KPI	1Q	2Q	3Q	4Q	KPI	1Q	2Q	3Q	4Q	KPI	
学会誌	面白い読み物	特集から連載へ 収支改善	満足度 頁数	▲読まれる学会誌 ▲新表紙	▲新企画・新連載等 ▲女性編集委員の活用	▲季節感を考慮した編集・発行 ▲100頁以内の編集・カラー頁削減	▼広告拡大	1252/1300頁	△読まれる学会誌 △新表紙	△100頁以内の編集・カラー頁削減	△季節感を考慮した編集・発行	△広告拡大	XXXX/1300頁	△読まれる学会誌 △新表紙					
	ファンの拡大	会員拡大 会員繋ぎ止め	広告	▲会員増への期待 ▲小中高生向け記事(漫画)	▲別刷り販売 ▲Nosstand販売拡大	▲著名人巻頭コラム ▲Web掲載、オンライン版との連携	▲学生・若手記事(ICFP等) ▲ジュニア会員向け記事	13/17百万	△電子書籍化検討 △別刷り販売	△著名人巻頭コラム △App Store販売拡大	△Web掲載、オンライン版との連携	△ジュニア会員向け記事	XX/16百万	△電子書籍化検討 △会員増への期待					
	投稿数増 採録数増	論文投稿件数 論文採録数増	投稿件数 採録件数 収支	▲英語化サポート(2人化開 ▲新査読システム移行(10月)	△招待論文 ▲Asia連携(CCF巻頭コラム)	△サバーベイ論文 △目標JJ320編、TRAN200編	▲学生・若手特集号 ▲マルチメディア化特集号(音楽情報)	578件 458/500本 1.7/-5百万	△英語化2人サポート △特集号積極企画	△招待論文 △サバーベイ論文 △標準化論文	△GoogleS挽回 △委員会企画特集号	XXX/500本 X/-6.5百万							
論文誌	IF取得	海外からのビビリティ グローバル化	疑似IF 国際会議	▼IF再申請 △CitationUP ▲JIP隔月刊H	▲無料キャンペーン→割引 ▲海外学会連携(CCF巻頭)	△CVA Springerより発行 △国際会議連携 ▼科研費申請	△CitationUP 目標0.5? ▲電子図書館掲載見直し	3/5件	△CitationUP 目標0.5 △割引キャンペーン見直し	△TCVA IF取得 △CVA Springer発行	△JIP月刊化 △国際会議連携	X/5件	△IF再申請?						
	研究会活性化	制度見直し 新研究分野	発表数 イベント数	▲新研究会、新研究グループ(AA ▲収支の見える化・収益up	△女性委員倍増 △調査研究の役割強化(政策提言、国際連携、政府・学術会議連携)	△研究の長期グランドデザイン、学術大型研究計画 ▲新規国際会議主催(ER2016)	シンポ1740、研究会3139 シンポ23、研究会161	△新フロンティアの開拓 △収支の見える化・収益up	△女性委員倍増 △調査研究の役割強化(政策提言、国際連携、政府・学術会議連携)	△管理費一部負担 △研究の長期グランドデザイン、学術大型研究計画	△国際会議		△研究会の見直し?						
	参加者増	魅力度アップ	登録数	▲参加者・登録者増 ▲日本工学会シンポ(講演者) ▲積立金活用Proj(IE)	▲SIG連携シンポ(ACSLDico ▲FITイベント企画	▲FITイベント企画 ▲WECC2015@京都	正会員5239/5300人	△参加者・登録者増 △SIG連携シンポ(ACSLDico △積立金活用Proj	△FIT見直し △企業表彰スポンサ	正会員XXXX/5300人									
事業 技術応用	イベント活性化	大会アウトプット増 FITアウトプット増	発表数 発表数			▲FITの意義、査読等見直し ▲FIT2015 愛媛大開催(目標1600人→120)	△フィット作戦 参加者増 ▲慶応矢上開催	3220/3200人	△フィット作戦 参加者増	△IPSJ-ONE、ニコ生放送	△大型PJ成果報告イベント	△名古屋大開催	XXXX/3200人					△早稲田検討中	
	企業連携イベント	FITアウトプット増	回数		▲CEDEC	▲企業連携イベント(G社)	▲リクルートイベント(G社)	1回	△FIT見直し	△フィット作戦 参加者増	△IPSJ-ONE、ニコ生放送	△大型PJ成果報告イベント	△名古屋大開催	XXXX/1500人			△東大開催(信学会100周年)		
	ITプロフェッショナル コミュニティ構築	ITフォーラム SWジャパン	登録者数 参加者数	▲活動状況報告・評価 ▲ITダイバーシティ見直し(解放、委員会 ▲新フォーラム発足(勉強会フォーラム)			▲集客、非会員へのリーチ(参加者増)	842/400人	△活動状況報告・評価 △勉強会フォーラム活性化					?					
		連セミ・短セミ	参加者数			▲連セミ集客900人(750超え)	▲若者向け短セミ(EX Coding)	▲標準化セミ	811/800人	△プログラム早期公開	△連セミ集客800人	△アークイブ	△Exciting Coding集客	XXX/800人					
		DP	採録数	▲編集長交代 ▼認知度向上、投稿・掲載増	▲Newsstand拡大 ▼DPLレポート拡大			8件(42%)	△掲載改善 △認知度向上、投稿・掲載増	△研究会、CITP連携 △DPLレポート拡大							△評価、見直し?		
		認定情報技術者(CITP)	認定数	▲企業認証本格化	▲CITPコミュニティ(立上)		△個人300人	個人 65/500人 企業0/5社 (2社審査中)	△個人200/100人 △企業5社3000人	△IP3申請準備	△CITPコミュニティ活性化	個人100人	△学会内で別組織化?						
		技術応用運営委員会			△各活動の連携強化、収益力アップ	△ITプロフェッショナルコミュニティの拡 企業5社 4000人			△各活動の連携強化、収益力アップ					企業X/5社 XXXX/3000人					
規格 標準化	時代変化への対応	制度改革	国際幹事件数	△幹事国獲得に向けた事務局体制の準備 △企業からの出向者を可能とするスキームの検討				議長3件、セクレタリー4件 コベナナ16件											
	活動の活性化	知名度向上	参加企業数	△主要国との連携策に関する検討 ▲活動アピールの手法としてのプレス発表の施策検討	△委員会構成におけるユーザ貢献の検討			規格賛助員 52団体 規格準賛助員 15団体						規格賛助員 規格準賛助員					
その他	政策提言	夢ロードマップ・マスタープラン対応 パブコメ・声明対応		▲声明・提言(上期5件) ▲パブコメ対応	△長期的研究のグランドデザイン				△夢ロードマップ改訂? △声明・提言	△長期的研究のグランドデザイン	△パブコメ対応								
	教育活動	人材育成ビジョン J17/J07後継カリキュラジュニア会員数	講習受講者数	▲教員免許更新講習会@東大(3日間延べ54名) ▲JABEE認定受託(4件)	△情報入試 ▲免許講習2回目@京大(6 ▲会誌連載「ベタ語義」「ヒパリオ・トーク」	延べ94名 668/2000人	△JABEE認定受託(8件) △J07普及、J17策定	△教員免許更新講習会 △教育シンポジウム	△情報入試 △会誌連載「ベタ語義」「ヒパリオ・トーク」	△教員免許更新講習会 △教育シンポジウム	△会誌連載「ベタ語義」「ヒパリオ・トーク」	XXX/2000人							
	学生会員育成	学生会員を2500名以上 昇格者を400名以上に	学生会員数	▲ジュニア会員制度への移行	▲ジュニア会員2000名(1000名11月) △学生コミュニティの立上	2695/3000人	△ジュニア会員制度本格導入 △学生会の正会員化率up	△ジュニア会員2000名 △学生コミュニティの立上				XXXX/3000人							
	デジタルコンテンツ 事業	新たな成果発表形態 新ビジネスモデル		▲ニコニコ提携・公式チャンネル ▲動画アーカイブ	▲電子図書館マルチメディア対応 △アーカイブの有料化(検討中)			△ニコニコ提携・公式チャンネル △動画アーカイブ	△ニコニコ提携・公式チャンネル △動画アーカイブ	△電子図書館マルチメディア対応	△電子図書館機能拡充	XX/75件							
	電子図書館		Sライセン契約数	▲マルチメディア対応 ▲企業向けサイトライセンス開始(目標70件。11月で50件)	▲NII協議会 ▲電子図書館機能拡充	50/70件	△GININ停止 △サイトライセンス拡販(+25件)	△NII協議会 △Google Scholar挽回											
	コンピュータ将棋	トップ棋士対局、青少年PR		▼あから2015検討	▲将棋連盟と折衝	▼トップ棋士との対戦 ▲終了宣言(10月)、会誌記事		△終了! △次なるフロンティアは?											
	AI/プロコン	世界規模開催 Samurai Coding	300チーム、1000人規模	参加チーム数		▲予選 ▲決勝戦@全国大会	参加 99チーム 決勝18チーム21名	△イベントスポンサー拡大 △Internationalization	△予選 △決勝戦@全国大会	参加チーム 決勝チーム									
	新生代企画委員会	IPSJ-ONE		▲若手主導の発想	▲ニコニコ新ビジネスモデル(論文販売) ▲新企画(Yahoo!ネット試行)	▲IPSJ-ONE		△新企画の定着化(ニコニコ生放送、動画配信、ニコニコ動画、IPSJ-ONE)	△新企画(Yahoo!ネット)	△勉強会フォーラム活性化									
	長期戦略	グローバル連携 長期課題		▲IEEE-CS SSA △学会収益構造	▲CCF MOU △グローバル化対応	▲CCF(巻頭コラム、CNCC2016) △情報システム、事務局体制	△KIISE(後藤理事 ▲CCF(来訪、訪問) △学会の長期ビジョン?	△COMPSAG MOU更新 △中長期計画立案	△CCF CNCC2016 △情報システム、事務局体制	△CJJK連携 △電子書籍化									
	女性活用	女子会員比率向上 女子の活動活性化	女性会員比率	▲正会員6%、学生会員13.6% ▲委員会立上準備	△イベント企画		7%?	△正会員7%、学生会員15% △Info-WorkPlace委員会発足	△イベント企画									△目標10%	
	事務局	会員サービス		会員数	▲会員増310人 ▲シニア会員拡大(94名)	▲ニコニコ公式チャンネル △ジュニア会員(2000人→1000人)	正 15699/16000人	△会員増200人 △ニコニコ動画連携	△新サービス △シニア会員	△イベント企画企業会員満足度向上	正XXXX/16000人	△新サービス?					△目標10%		
		情報システム			▲優先順位見直し △セキュリティポリシー、ガイドライン見直し	▲VM移行 ▲ジュニア会員サポート	△MMSリニューアル △システムエンハンス		△計画策定 △MMSリニューアル?	△研究会・支部統合	△イベント参加対応								
		学会システムWG			▼情報基盤構築・活用(中断)	▲VM移行 ▲ジュニア会員サポート	△ロードマップ作成		△ロードマップ作成 △INPACT中断										
学会Web				▼英語ページリニューアル ▲新会長対応	△SEO対策 △SNS連携?	▲メディア露出(日経TechOnline) ▲非会員へのリーチ		△メディア露出 △非会員へのリーチ	△SEO対策 △ユーザビリティ改善	△英文ページリニューアル									
学会組織				▲女性理事枠拡大 ▲女性委員、女性会員増(学生13.6%、ジュニア20%)	△CJJK連携			△事務局後継者育成 △女性理事枠拡大 △女性委員、女性会員増		△CJJK連携(事務局レベルWork Shop)									
学会運営			黒字確保 収益	▼寄付募集 ▲総会 IPSJコンベンション ▲Aボード △シニア会員拡充(500人増) ▲新会長対応	▲ジュニア会員制度 △セキュリティガイドライン		黒字12百万	△総会 講演会他 △大型企業賞 △シニア会員拡充(500人増) ▲寄付募集	△入会手順変更 △収益拡大 △会費値上げ	黒字	△事務局長交代								
震災復興	震災復興支援			▲会長連携シンポ(出番ナシ) ▲Aボード ▲日本工学会シンポ	▲FITイベント開催	▲復興5周年(会誌3月号で特集)		△会長懇談会 工学連携? ▲Aボード			△熊本地震対応						復興7周年		
					▲WECC2015成功!														